

**靖国神社は、生者を死処（戦場）に駆り出すだけでなく、
非業の死をとげた者の魂の安住の地（故郷や家族のもと）まで奪うもの**

～以下、「<論壇時評>『外注』した政治 戦後70年 いま取り戻す（作家 高橋源一郎）」（朝日新聞 15.8.27）より引用～
<文中の太字、（ ）とその内文は引用者による>

柳田（国男）は、烈はげしい空襲が続く東京で、夥おびただしい死者を目の当たりにしながら、死者を弔うとは何か、と
考えつづけた。とりわけ「南の海などで非業の死をとげている若者の魂はどうなるだろう」と。

**日本人は、ずっと、死んだ人間は、故郷の地に集まり、そこから生きている者を見守り、やがて、子孫から敬われ、
弔われることで、すべての祖先の霊と合体してゆく、と考えてきた。**だが、戦争による夥しい死の中で、子孫を作るこ
となく、異国で亡くなった魂はどうなるのか。そして、柳田は、日本人固有の死生観に基づき、「国に残った縁あるモッ
ト若い人たちが、海の藻屑もくずとなったり、ジャングルの奥で野ざらしになった死者の養子となることで、彼らを先祖
にし、その子孫となり、彼らを敬い、弔うようにしてはどうか、という」破天荒な政策を提案した、と加藤は指摘して
いる。

わたしは、加藤（典洋）のエッセーに導かれて、問題の書（柳田国男の）「先祖の話」を読んだ。そして、その静かな
文章の底に、戦争の災禍を前にした、柳田の怒りと慟哭どうこくが流れているのを感じた。

柳田は、戦争の死者を、ひとりひとりの個人が作る「家」が弔う、という形を提唱することで、「国家」が弔う、とい
う靖国神社のあり方を、もっとも深いところで批判している。「戦争の死者」が戻りたかったのは、靖国ではなく、彼
らの故郷や家族のもとのはずだったから。